

文壇資料

浅草物語

高橋 勇

講談社

文壇資料

浅草物語

高橋 勇

講談社

著者略歴

1912年9月栃木県小山市に生まれる。関東学院社会事業部を中退。戦中、満洲新聞社学芸部に勤務。終戦後は専ら文筆活動に従事する。詩誌『時間』、文芸誌『文学双紙』の同人。著書に『高村光太郎』『白い谷間』、詩集『虹』等がある。

© 1979

ISAMU TAKAHASHI

第1刷 昭和54年5月15日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

文壇資料 浅草物語

定価 1300円

著者 高橋 勇

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(945)1111(大代表)

郵便番号 112 振替東京 8-3930

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

0095-269775-2253 (0) (セ)

目次

「パンの会」の芸術家たち 7

大川端 8

森鷗外と『キタ・セクスアリス』 14

雷門「よか楼」 23

魔の宴 33

メーゾン「鴻の巣」の人びと 39

隅田川沿岸と浅草広小路 55

永井荷風と『三田文学』 56

『溼東綺譚』の頃 65

荷風を囲む女たち 75

久保田万太郎と海^{ばい}贏^い廻^し 92

机の記 101

浅草仲見世 110

浅草「六区」と言問橋 119

幻の凌雲閣とひょうたん池 120

浅草オペラからカジノ・フォーリー時代へ 128

『浅草紅団』の周辺 138

向島小梅町と二人の作家 155

大正・昭和初期と「染太郎」 181

『辻馬車』時代前後 182

浅草第七番札所と『日本三文オペラ』 193

「お好み焼 染太郎」のこと 210

『人民文庫』をめぐって 223

「制作座」悲詩 228

『一の酉』のモデル 240

オペラ館時代 245

浅草「五一郎アパート」 246

『如何なる星の下に』と三人の詩人 251

あとがき 270

主要参考資料 273

参考附図 278

装幀・森下年昭

文壇資料
淺草物語

「パンの会」の芸術家たち

大川端

明治四十五年（一九一二）四月十三日、石川啄木が『悲しき玩具』の出版を待たずに永眠したときは、間もなく明治は終わろうとしていた。

浅草等光寺（土岐善磨の実家）で、啄木の告別式を終えた北原白秋、木下杢太郎、山本鼎、山本陽吉の四人は、連れだつて等光寺を出て、雷門の前を通つて「よか楼」へ上がった。

この四人は『新詩社』当時から、啄木の親しい友だちであつた。コーヒーを飲み、マカロニを食べながら、みんな黙っていた。

明治四十一年（一九〇八）十二月から、バリの芸術家たちの集會に模して、セーヌ川にならい、隅田河畔で開かれてきた「バンのかい」の饗宴は、すでに幕を閉じていた。芸術家たちは、それぞれの分野の仕事に意欲を燃やして、若い翼を羽ばたいていった。その最後の饗宴の場が「よか楼」であつた。

「バンのかい」の終わりには、みんながラッパ節で合唱したという、白秋がつくった歌がある。

空に真赤な雲の色。

玻璃（瓶）に真赤な酒の色。

なんでこの身が悲しかろ。

空に真赤な雲のいろ。

北原ら四人が黙って歩いて、いつの間にか「よか楼」に來たということは、きわめて自然だったのであろう。ここに來て啄木の死をもう一度心の中でたしかめ、訣別をしたかった、そんな氣持かもしれない。

「パンの会」は、木下杢太郎と北原白秋が首唱したといわれているが、『明星』を脱退した木下らと、美術雑誌『方寸』の画家石井柏亭らとが共に興じたもので、はじめの主旨は、文学と美術の交流をはかつて、ヨーロッパの新しい芸術を吸収しようという一つの文芸運動であり、また封建時代の遺風に抗する欧化主義運動の意味も含まれていた。したがって、参加した人びとは詩人、作家、美術家、演劇家、音楽家、それにジャーナリストを交えた文化人たちで、今日では考えられないような芸術家合同の催しであった。当時の發起人を含めた名前をあげると、木下杢太郎（太田正雄）、高村光太郎（明治四十二年帰国後参加）、本居長世、石井柏亭、倉田白羊、小山内薫、小杉未醒、安成

貞雄、山本鼎、吉井勇、阿部次郎、木村莊太、和辻哲郎、谷崎潤一郎、永井荷風、上田敏、市川左團次、森田恒友、長田秀雄などの名が見える。

当時東京帝国大学の医学部の学生であった木下杢太郎が、大川端を一日じゅう探し歩いたと記録にあるのは、「パンの会」のはじめの頃のことであろう。会場は一カ所にとどまらず、両国の「第一やまと」、永代橋の「永代亭」、日本橋小伝馬町の「三州屋」、雷門の「よか楼」などであった。

両国の橋のたもとの三階の

窓より牧羊神バシの踊り出づる日

吉井勇は両国の「第一やまと」で開かれた「パンの会」の第一回の饗宴で、若い芸術家たちの熱気にあふれた情景をうたっている。

また、永代橋の「永代亭」での会合については、木下杢太郎が「食後の唄」にその情景を次のように書いている。

——永代橋を渡つての袂たもとに、当時永代亭といへる西洋料理屋ありき。その二階の窓より眺むるに、春月の宵などには川の面鍍金おもてめつきしたるがごとく銀白に、月影往々その上に激盪れんえんたる光を流し

ぬ。かかる折しもあれや、一艘の小さき舟来る。形あたかも陰画かげまの如く、白光の面に劃然たる黒影を現して、舟中ふねなかの人々の拳けんを闘はし嬉遊する様、真に滑稽の極みにてありき。我等パンの会同志しはしばは屢しばしばこの家の階上つとに集ひてパンを祭るの酒宴を開きたり。(木下杢太郎「食後の唄」)

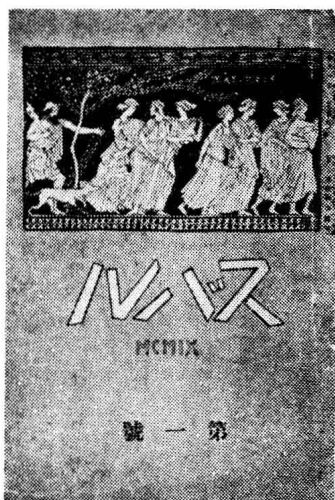
この文に見られるように、「パンの会」は、「永代亭」でも数回開かれていることがわかるが、さらに小伝馬町の「三州屋」でも、しばしば開かれたことを木下の文章は証明している。

ちなみに「パン」(pan)の名称は、ギリシア神話にみえる「牧人と家畜の神」からとった名であるが、これが一般には「食べるパン」の意味にとられて、社会主義とつながりがあるのではないかと警察の取り調べを受けたこともあったといわれる。「パンの会」で有名になっているのが「黒棒事件」である。幸徳事件の直後の明治四十三年(一九一〇)十一月二十日、「三州屋」で開かれたときのことで、この日は『白樺』『三田文学』『新思潮』の同人を招待しての会であり、また、日本画の石井柏亭の洋行と、柳敬助(洋画家)、長田秀雄の軍隊入営の送別をかねた会でもあった。この日の出席者のなかには、與謝野鐵幹、蒲原有明、永井荷風、武者小路實篤、里見弴などの姿も見えた。谷崎潤一郎は二十五歳、この日、永井荷風と初対面したときの感激を「青春物語」に書いている。

「黒棒事件」というのは、出征する柳敬助と長田秀雄の二人の仲間を祝うために、高村光太郎が長



『明星』終刊号（明治41年11月）



『スバル』第1号（明治42年1月）

旗に「祝長田秀雄君 柳敬助君之入営」の文字を書いた。酒の勢いも手伝って、この二人の名の旗に、さらに墨で黒い枠をつけ加えて会場の壁にかけた。これには、集まる人びとが爆笑した。名前が喪章でかざられたように見えたからである。ちやうど幸徳事件の被告の判決を直前にして、この無政府主義者の大検挙を、インテリ層の多くは反感を抱いていた。これが「パンの会」の若い芸術家たちに衝撃をあたえたことは当然であった。

このことを、会場にいた『万朝報』の記者がとりあげ、翌日の社説に「徴兵制度を非難するパンの会は亡国的非国民芸術家の集まりである」と、二日間にわたって論評したので、波乱をよんだ。「パンの会」のもっとも盛んな時代であった。

これより前、明治四十二年（一九〇九）一月、森鷗外を中心として『スバル』（昂）が創刊され

た。十年にわたって詩壇に輝やいた『明星』が百号記念号を迎えて、前年の十一月、歴史的な幕を閉じた。『スバル』は、その後をうけて、新詩社関係のほとんどの人たちが、これに参加した。出資者は、あとに幸徳事件の弁護士となった平出修で、『スバル』の同人でもあった。

石川啄木、平野萬里、木下杢太郎、吉井勇の四人が編集に当たった。

平出修は與謝野鐵幹の門弟であり、啄木の友でもあった。明治四十三年（一九一〇）十二月二十五日、大逆事件公判で全員死刑の求刑があったとき、管野すがは、若手弁護士平出修の弁論に感激し、翌年一月九日、死刑宣告前に、

只一人目に立つ若き方の御熱心さ、同時に又如何なる御論の出づべきやなど、ひそかに存じ居り候ひしに、力ある御論、殊に私の耳には千万言の法律論にもまして嬉しき思想論を承はり、余りの嬉しさに、仮監に帰りて直ちに没交渉の看守の人に御噂致し候程にて候。（絲屋寿雄『管野すが』岩波新書）

と、平出弁護士へ礼状を書いている。のちに、平出修は小説「逆徒」を書いた。

森鷗外と『キタ・セクスアリス』

鷗外・森林太郎が、「キタ・セクスアリス」を『スバル』に発表したのは、明治四十二年（一九〇九）七月であった。

この小説の主人公である哲学者金井湛^{しずか}は、鷗外自身をそこにおきかえて大体まちがえないといわれている。この小説が向島、浅草が背景になっているのは、鷗外が幼年から少年への時代を向島に過ごしたことによる。

鷗外は明治五年（一八七二）廃藩置県後、十歳のとき、生家の島根県津和野から、父静男に連れられて上京し、向島小梅村（現在の小梅町）に住んだ。のち、父は橘井堂医院を開業した。

鷗外は少年時代を、神田西小川町の同郷の先輩であり、また姻戚関係でもあった西周^{あまね}邸や、東京医学校の寄宿舎に住み込んで、家族とは離れていたが、小梅の家には日曜日や、夏休みなどの休暇にはかならず家に帰っていた。

向島小梅町といえば、堀辰雄も三歳のとき、母に連れられて移住した地であり、佐多稲子も十一